

大阪大学に補完代替医療の講座開設 健康食品などの補完代替医療の客観的評価を目指す

前号でもお伝えしたとおり、2005年1月に大阪大学大学院医学研究科に「生体機能補完医学講座」が開設された。補完代替医療を専門に研究する講座が日本の国公立大学医学部に開設されるのは、金沢大学、山梨大学に次いで3例目となる。大阪大学大学院医学研究科臓器制御外科の伊藤壽記助教授を教授に迎え、臓器制御外科（第一外科）教室を協力講座として、補完代替医療を科学的に解明し、臨床試験によってその有用性を証明することを目的としている。国内外の補完代替医療分野の研究者との連携を図り、これまでの医療と補完代替医療との今後の関わり方を念頭に置いた研究活動を行う。当初の設置期間は3年間で、成果によっては延長もあり得るとしている。寄附者は株式会社アミノアップ化学。

補完代替医療を扱う講座は、金沢大学大学院医学研究科に「補完代替医療学講座」が2002年2月に開設されたのが第1号であり、石川県の財団である石川天然薬効物質研究センターが寄附している。次いで2002年10月、山梨医科大学（現、山梨大学医学部）に「代替医療国際協力講座」が開設された。キノコのサプリメントなどを事業化している株式会社応微研（山梨県石和町、堀内勲社長）が寄附している。

今後の同講座の研究方針などについて伊藤教授にコメントをお寄せいただき、今号の本誌上で紹介している。AHCCや、GCPなどの生理活性物質を用いた研究では、消化器がん、炎症性疾患、糖尿病などの生活習慣病を対象とした二重盲検の臨床試験が計画されており、大阪大学のIRB

（施設内倫理委員会）の承認のもと、大阪大学医学部附属病院や関連施設における大規模な臨床試験となる模様。

寄附者である株式会社アミノアップ化学はAHCCやGCPのメーカーである。本会の顧問でもある同社の代表取締役小砂憲一社長は次のように語る。「最近になって健康食品やサプリメントが医療現場でも用いられるようになってきたとはいえ、医学的根拠が確立したものであるとはほとんどないのが現状。健康食品業界自体がそういったこととは縁遠く、無定見な業界だったといえる。臨床試験などを通じて当社の製品についての医療向けサプリメントとしてのエビデンスの確立を目指すのは勿論だが、健康食品業界全体の社会的地位や、医療におけるサプリメントの利用性の認知度を底上げできたらいい」。

同社は、10数年にわたってAHCCなどの物質を医療現場に提供し、実績を上げてきている。その臨床研究の成果は、関西医科大学の上山泰男教授のグループが発表した論文（Y. Matsui *et al.*, J. Hepatology, Vol. 37, 78-86, 2002）や、2003年に刊行された医学専門書「AHCCの基礎と臨床（ライフ・サイエンス社）」など、医学的根拠として認知される形でまとめられ始めている。当会の活動も含め、同社がこれまでに築いてきた医療現場や研究者とのネットワークは、今回の大阪大学における寄附講座の開設によりさらに活性化され、機能的になるとともに、バックデータのさらなる質的向上が期待される。



大阪大学医学部附属病院



生体機能補完医学講座のロゴマーク
大阪大学の校章でもあるイチヨウの葉をモチーフにしている。

生体機能補完医学講座

教授 伊藤 壽記(いとう としのり)

1977年、大阪大学医学部医学科卒業。大阪警察病院外科・心臓血管外科、大阪大学医学部附属病院第一外科、米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校医学部外科、テキサス大学ヒューストン校医学部外科などを経て、1997年大阪大学医学部助教授に就任。2005年より大阪大学大学院医学系研究科生体機能補完医学講座教授。

助手 井倉 技(いぐら たくみ)

1990年、大阪大学医学部医学科卒業。市立豊中病院内科、大阪大学医学部附属病院第二内科などを経て、2005年より大阪大学大学院医学系研究科生体機能補完医学講座助手。

大阪大学大学院医学系研究科 生体機能補完医学講座開講にあたって

大阪大学大学院医学系研究科生体機能補完医学講座
教授 伊藤 壽記



この度、1月1日をもって、大阪大学大学院医学系研究科生体機能補完医学寄附講座を担当させていただくことになり、その開講に当たり、一言抱負を述べさせていただきます。

近年、医学ならびに医療技術の進歩に伴い、各疾患や病態における治療成績の向上がみられ、各々に対して科学的根拠（EBM）に基づいた標準治療ならびにガイドラインが提示され、それらに沿った治療がなされようとしております。また、一方ではオーダーメイド治療などの個別治療といった方向性も示されております。こうした中で、患者さんはインターネットなどによる情報の急速な普及により、予防医学や自己健康管理への関心度が増すとともに、患者さんによる治療選択の際の自己決定意識が高まりつつあります。また、患者さんは治療を受けるに際してQuality of Life（QOL）を第一義的に考えておられ、患者さんのQOLを重視した医療が求められています。

以上のことを背景として、最近、補完代替医療（Complementary and Alternative Medicine：CAM）という新たな領域が現れ、脚光を浴びております。しかしながら、CAMの大半はEBMによる検討が行われておらず、そのためにはRCT（Randomized Controlled Trial：無作為化比較試験）による臨床試験によりその評価を行わねばなりません。私はこれまでに消化器外科医、移植外科医として、消化器癌、炎症性腸疾患（IBD：Inflammatory Bowel Disease）、末期重症糖尿病等の疾患を中心に、手術療法、補助化学療法、免疫遺伝子治療、移植医療（腎・脾島）、再生医療の領域で、EBMを目指して臨床・研究を進めてまいりました。特に、最近では患者のさらなるQOLの向上といった観点より、現行の治療効果を高

めるための包括的な治療体系の構築を目指して、その方法を模索しております。私はこうした経験に基づいて、免疫賦活剤、免疫調整剤や天然物に由来する生理活性物質を含有する栄養機能食品やサプリメントなどによるCAMの各種疾患・病態における意義につき、臨床試験によるEBMに基づいた検討を行い、CAMが医療の中に占める役割を検証していきたいと考えています。

臨床研究の内容としては、まず、悪性腫瘍（特に、胃癌・大腸癌・膵癌・肝癌などの消化器癌や肺癌）の患者さんを対象として、術前・術後の補助（放射線）化学療法時の有害事象に対するCAM（高分子多糖体、AHCC、βグルカンなど）の併用効果につき検討し、最終的には総合的なQOLの改善を目指して、CAMが集学的治療の1つとなるよう位置付けたいと考えております。次に、炎症性疾患は難治性のIBDを取り上げ、ステロイドなどの免疫抑制剤とCAM（腸内細菌叢を安定化させるプロバイオティクス、プレバイオティクスあるいはそれら併用によるシンバイオティクス）との併用にて、病態改善および有害事象軽減効果を検討します。また、移植医療では日和見感染に対する防御および免疫抑制療法による有害事象に対するCAM（抗酸化物質など）の効果につき検討したいと思います。さらに、生活習慣病として糖尿病に注目して、その各種合併症に対するポリフェノールやビタミンEやCなどの抗酸化作用を有するサプリメントを用いたCAMによる改善または進行遅延効果を検討します。また、上記の臨床に関連した基礎的研究についてはtranslational researchを目指して、全国レベルでの共同研究体制を展開したいと考えます。なお、当院で行う臨床試験に関しては、原則として、病院長指導のもとに、母教室である臓器制御外科（旧第一外科）講座をはじめ、大阪大学医学部附属病院の関連講座ならびに関連病院の協力を得て臨床研究を行い実施・検証していきたいと考えます。

以上より、本講座の使命として、臨床試験を通じて科学的根拠に基づいたCAMの客観的評価を行い、単なる補完、代替の医療ではなく、集学的治療の中で現状の医療と有機的に融合する道を探りたいと考えます。

大阪大学生体機能補完医学講座開講記念講演 — 一同記念祝賀会と併せて大阪で開催 —

去る2005年5月7日(土)、大阪府立国際会議場(グランキューブ大阪)の特別会議場にて大阪大学大学院医学系研究科生体機能補完医学講座(伊藤壽記教授)の開講記念講演会が開催されました。会場には同講座ならびに大阪大学大学院医学系研究科外科学教室(旧第一外科)や伊藤壽記先生に所縁の先生方をはじめ(株)アミノアップ化学の関係者など約230名が集まり、いずれもそれぞれの分野における第一人者の先生方による講演に熱心に聞き入っていました。講演は「自然免疫による病原体認識システム」審良静男先生(大阪大学微生物病研究所癌・発生研究部門 癌抑制遺伝子研究分野教授)、「5-FUの基礎と臨床—5-FUの効果増強を目指して—」前原喜彦先生(九州大学大学院医学研究院消化器・総合外科学教授)、「炎症性腸疾患の病態解明とより良い治療法を目指して」日比紀文先生(慶応義塾大学医学部消化器内科教授)より併せて3演題。

審良静男先生のご講演では病原体認識システムとしてToll-like receptor(TLR)の分類と機能について詳説され、樹状細胞を介した自然免疫による抗腫瘍免疫の活性化は補完代替医療(CAM)においても重要なテーマの一つとして言及され、がん抗原があってTLR反応だけを強くしても、逆に制御性T細胞が働いて免疫は抑制的になってしまうので、がんの状態によっては制御性T細胞を抑える必要性についても説明されました。

5-FUの作用機序から効果増強のための試みを開発段階の貴重な体験を交えてお話しくださった前原喜彦先生からも、抗がん剤の効果の判定には腫瘍の縮小のみならず、延命による生活の質(QOL)すなわち「患者の幸せ」を評価できる方向性に対する認識が生まれてきており、まさにCAMにおいて必要とされる評価の体系であると思われました。

また、日比紀文先生はCAMにおいて重要な課題になるであろう難病治療について、ご専門の炎症性腸疾患の治療法について講演され、生体機能補完医学講座においても西洋医学で見通しの暗い対象疾患をターゲットにしてほしいとのコメントも述べられました。

記念講演の後、隣接するリーガロイヤルホテル大阪において開講記念祝賀会が催され、大阪大学大学院医学研究科長遠山正邇先生、大阪大学医学部附属病院長荻原俊男先生方が祝辞を述べられた。遠山先生はその祝辞の中で「補完代替医療にエビデンスを求める必要性を大学が認知し、講座を持つことは意義深い。新しい波を日本、世界へ阪大から起こすことが大学の責務である。重責だが、全力を挙げて一日も早くすばらしい成果を上げ、科

学的な補完医療の確立を望む」と述べられ、同講座への意義に期待を込められました。また、祝辞の中では同講座の設立にご尽力された伊藤教授や前大阪大学医学部附属病院長、大阪大学名誉教授の松田暉先生の労をねぎらう言葉も多く聞かれました。

最後に伊藤壽記先生から「補完代替医療はまだ未熟で、エビデンスに乏しい領域ではあるが、医薬品と変わらないエビデンスを得ることを講座の使命としたい」と抱負を込められた挨拶で祝賀会を閉じ、生体機能補完医学講座の輝かしい未来を展望させるすばらしい講演会・祝賀会でありました。



講演会で挨拶をされる伊藤教授



祝賀会後の記念写真。左から北川先生(阪大・外科)、井倉先生(生体機能補完医学講座助手)、伊藤先生夫妻、松田先生(阪大名誉教授)、田中氏(生体機能補完医学講座秘書)、小砂氏((株)アミノアップ化学社長)